

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720001

研究課題名(和文) 西洋中世とイスラム世界の法概念の比較哲学的考察：トマス、アヴェロエス、ガザーリー

研究課題名(英文) Comparative Study on the Concept of Law in Western Medieval World and Islamic World: Aquinas, Averroes and Ghazali

研究代表者

山本 芳久 (YAMAMOTO YOSHIHISA)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：50375599

研究成果の概要(和文)：

西洋中世哲学とイスラーム哲学は、通常、別々の研究者によって研究されることが多い。本研究の独自性は、これら二つを同じ土俵に乗せて比較哲学的に考察していることのうちに見出される。具体的には、トマスの自然法概念とアヴェロエスの法思想を比較考察することによって、キリスト教世界とイスラーム世界の思想構造の連続性と非連続性の双方を明らかにした。現代の世界情勢の中において、文明間対話ということが焦眉の課題となっているが、或る意味では共通の地平の中で文明を形成していたとも言える「中世哲学」の時代に着目することによって、対話の新たな可能性が浮き彫りになった。

研究成果の概要(英文)：

The originality of this study is found in the fact that western medieval philosophy and Islamic philosophy are investigated in their mutual relationship. Concretely speaking, I made clear both the connection and disconnection between the thought of the Christian World and the Islamic World by the comparative study of the concept of natural law in Thomas Aquinas and the concept of law in Averroes. The dialogue between the Christian World and the Islamic World is an urgent task for us today. In this study, by paying attention to the philosophical thought of the middle ages, in which both world formed their civilization in the same legacy of Greek philosophy, a new possibility of the dialogue between the two civilizations is made clear.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総計	4,900,000	1,470,000	6,370,000

研究分野：

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：西洋中世哲学、イスラーム哲学、法哲学、トマス・アキナス、アヴェロエス、

1. 研究開始当初の背景

数回にわたる欧米への留学および国際学会への参加の中で、欧米の中世哲学研究の新たな潮流に刺激を受け、日本の中世哲学研究に大きな欠落部分があることを痛感した。日本における従来の研究は、その視野を、ラテン・キリスト教世界における哲学・神学研究に限定しすぎてきたために、同時代において他の地域において展開していた思潮に対する目配りが欠けていたという問題である。

実際には、ラテン世界において中世哲学が展開していた同時代において、ユダヤ、イスラーム、ビザンティンなどの他の一神教諸文明においても、それぞれの神学体系と古代ギリシア哲学との対話が徐々に進んでいた。三つの一神教の知的伝統が同一の基盤を有するようになったのは、セム的な一神教としての共通性のみによるのではなく、ギリシア哲学（特にアリストテレス）の受容の共通性によるところが大きい。

このような経緯の全体を視野に入れた中世哲学の全体像の構築が世界的な規模で要請されるようになってきている。我が国においては、西洋中世哲学に関しては、既に、数多くの研究が遂行されており、また、イスラーム哲学・イスラーム法に関する優れた専門家も存在している。だが、それらが孤立的な営みとなっていることに問題があることを痛感し、本研究遂行の必要性を自覚した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、従来別々に研究されることの多かった西洋中世哲学とイスラーム哲学を同じ土俵に乗せて研究することによって、大きく分けて以下のような三つの研究成果を得ることである。

第一の目的は、思想史研究における空白部分を埋め、古代ギリシア哲学からイスラーム世界を経てラテン・キリスト教世界に至る哲学史の根本的な書き換えを行なうという基礎的研究の遂行である。

第二に、法の哲学的根拠づけという哲学の根本問題の一つに関して、比較哲学的観点から取り組むことを目的とする。

第三に、現代の世界情勢の中において、文明間対話ということが焦眉の課題となっているが、そのような課題に対して、西洋近代的な観点からのみ取り組むのではなく、或る意味では共通の地平の中で文明を形成していたとも言える「中世哲学」の時代に注目することによって、両文明間の連続性と非連続性の詳細をより明らかにするとともに、対話

の可能性を新たな仕方で見出すというアクチュアルな課題の遂行を目的とする。

このように、本研究は、地道な哲学史的・文献学的研究、法哲学的探求、そして文明論的対話という相互に関連した重層的な目的を有している。

3. 研究の方法

本研究のように異質な分野を同時に取り扱う比較思想的研究においては、要求される課題が大きいために、広がりはあるがテキストの表層をなぞっただけの深みに欠けるステレオタイプ化された研究がしばしば見受けられる。だが、逆に、テキスト解釈のわけ道に入りこんで、いわゆる「木を見て森を見ない」状態になってしまうことも避けなければならない。

このような両極の誤りを避けて有意義な仕方での研究目的を達成するために、本研究においては、まず初めに基本的な作業仮説を立て、その作業仮説をもとにテキストを熟読吟味し、そのことによって作業仮説に修正を加えていく、という方法論を採る。明確な切り口を持ったテキストの熟読によって、それぞれの分野の専門家に優るとも劣らない分析をそれぞれのテキストに対して行なうことによってはじめて、有意義な比較思想的研究は達成されるのである。

その作業仮説とは、以下のものである。すなわち、キリスト教は、ヘレニズムにおいて既に古典的な哲学の諸学派が活発に活動していたグレコ・ローマン的な文脈の中に新宗教として誕生してきたため、当初から哲学との密接な相互関係があった。それに対し、イスラーム教の場合には、『クルアーン』における神の啓示によって基礎づけられた法体系によって文化的・政治的に徹底的に規定された文脈において、哲学は異質な輸入物として導入されたため、常に宗教との緊張関係に置かれ、周辺的な営みに留まらざるをえなかった。その結果、キリスト教世界においてはスコラ哲学の中で理性と信仰の調和が達成されたが、イスラーム世界においては神の絶対的な超越性の強調の下に、哲学的理性は重要な役割を果たすことができなかったというものである。

このような見解は、一部の専門家の中においてのみ抱かれているものではなく、微妙に形を変えながら、世界の中で広く受け入れられ、人々が様々な出来事を解釈するさいの大きな枠組みを与えているものだと言える。例えば、2006年9月にレーゲンスブルク大学で行なわれた教皇ベネディクト十六世の「信仰、

理性、大学」という講演は、まさにこのような考え方に基づいた内容となっており、欧米とイスラーム世界の双方を巻き込んだ活発な議論を巻き起こしたことは、我々の記憶に新しいところである。

だが、実際には、キリスト教世界の側にも、オッカムのように神の絶対的な超越性を強調する立場もあったし、イスラーム教の側にも、イブン・ルシュドのように理性や哲学の重要な役割を強調する立場も存在したのである。

それゆえ、専門家・非専門家を問わず幅広く受け入れられている上記の見解を基本的な作業仮説として受け入れつつ、ラテン世界とイスラーム世界を代表する哲学者のテキストを分析することによって、上記の一般的な見解を微視的な観点から再検討し、その作業仮説を微調整または大きく修正するような洞察を得、簡単に類型化することのできない、一枚岩ではない双方の知的伝統の豊かさを明らかにする。

4. 研究成果

上述のように、本研究の目的は、従来別々に研究されることの多かった西洋中世哲学とイスラーム哲学を同じ土俵に乗せて研究することによって、以下のような研究成果を得ることである。(1) 思想史研究における空白部分を埋め、古代ギリシア哲学からイスラーム世界を経てラテン・キリスト教世界に至る哲学史の根本的な書き換えを行なう。(2) 法の哲学的根拠づけという哲学の根本問題の一つに関して、比較哲学的観点から取り組む。(3) 共通の地平の中で文明を形成していたとも言える「中世哲学」の時代に注目することによって、キリスト教文明とイスラーム文明との連続性と非連続性の詳細を明らかにする。

このような全体的構想の中で、2008年度と2009年度は、アヴェロエス（『決定的論考』・『矛盾の矛盾』）とガザーリー（『哲学者の矛盾』）のテキストの綿密な読解に取り組んだ。ガザーリーの哲学者批判の書物である『哲学者の矛盾』は、アヴェロエス『矛盾の矛盾』によって反批判されたものであり、イスラーム世界における哲学的理性の位置づけを複眼的な視点で理解するためには、これらの著作を比較考察することが極めて有効であった。

ガザーリーに関しては、哲学を完全に否定したという解釈から、彼の哲学批判は哲学を知り尽くしたうえでの哲学的批判であるという解釈（中村廣治郎『ガザーリー研究』2002年）まで、多様な解釈が存在しているが、それらの解釈を批判的に検討した。また、アヴェロエスはガザーリーの哲学批判の反批判

に最終的に成功することはできなかったもので、以後イスラーム世界では哲学は衰退するという通説に対して、現代を代表するイスラーム哲学の研究者である Dimitri Gutas は、“The Study of Arabic Philosophy in the Twentieth Century,” という論文で辛らつな批判を展開し、その後、研究者の間で活発な議論が行なわれているので、それらの議論を批判的に検討した。

また、これらの研究を進めるうえで、英国、ドイツ、トルコ在住の研究者との交流と討議の中で、豊かな刺激を得た。

2010年度は、主に、アヴェロエスの『決定的論考』についての綿密な読解と論文執筆に取り組み、その成果を、「アヴェロエス『決定的論考』における「法」と「哲学」の調和」（『国際社会科学』第60輯、21-38頁）という論文にまとめた。この論文は、平成22年度のみではなく、三年間の研究全体の総括とも言える論文であり、アヴェロエスがガザーリーによる哲学批判をどのように反批判したのかという見地から、アヴェロエスの法思想についての体系的考察を、ラテン世界の法思想との比較思想的考察という観点を含め、広い視野のもとに展開したものであり、その具体的な内容は下記のとおりである。

アヴェロエスのテキストは、十三世紀にラテン語に翻訳され、ラテン・キリスト教世界に大きな影響を与え、いわゆるラテン・アヴェロエス主義を生むこととなった。ラテン・アヴェロエス主義者は、「哲学によれば偽であるところの多くの事柄が、信仰によれば真理である」と定式化されるいわゆる二重真理説を信奉しているとして、教会当局からの断罪を受けた。だが、アヴェロエスは、『法学（シャリーア）と哲学の関係を定める決定的論考』において、「真理は真理と対立することはない。むしろ、〔哲学的〕真理は〔宗教的〕真理と一致し、その証となる」と、全く対極の事を述べているのである。（ラテン・アヴェロエス主義研究の第一人者である川添信介氏の『水とワイン—西欧13世紀における哲学の諸概念』（2005年）においても、アヴェロエス自身のテキストに基づいたこのような経緯については殆ど触れられていないというのが実情である。）

なぜ、ラテン世界とイスラーム世界において、ここまで対照的な理解の落差が生じたのであろうか。アヴェロエスの見解がラテン世界に正確に伝わらなかった最大の原因は、『決定的論考』がそもそもラテン語に翻訳されなかったからである。同書が翻訳されなかったのは、イスラーム法学の書物とみなされ、キリスト教世界の学者の関心を惹かなかつたためである。教義の宗教であるキリスト教に対して、法の宗教であるイスラームの中心的学問であるイスラーム法学は、キリスト教

徒の学者達の関心を惹かなかつたため、翻訳されなかつたのである。そのことは、同じく法の宗教であるユダヤ教界で同書が翻訳・翻案され影響を与えていた事実からも裏付けられる。

ラテン・キリスト教世界においては哲学と神学という二極の緊張関係が存在していたのに対して、イスラーム世界においては哲学と神学と法学という三極の緊張関係が、法学を軸に存在していた。イスラーム世界からラテン世界への哲学的影響関係を考察するさいには、西洋中世の哲学書の中に引用されているイスラーム世界の哲学書を同定し、それを読解して比較するというのみでは充分ではない、ということはこの事実を示している。どのようなテキストがなぜ翻訳されなかつたのかということも含め、より広い視野からの研究が必要となる。ラテン世界からイスラーム世界の知的営みを位置づけようとする視点のみではなく、逆に、イスラーム世界の知的営みの光に照らしてラテン世界の哲学を位置づけ直す視点も必要なのである。

西洋中世哲学とイスラーム哲学との同時的研究による相乗効果の獲得を目指している本研究は、この論文において、その基本的な目的を達成したと言えるが、同時に、新たな課題も上記のような仕方で明らかになったので、今後は、そのようなより広い観点からの考察に取り組んでいく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

(1) 山本芳久「アヴェロエス『決定的論考』における「法」と「哲学」の調和」、『国際社会科学』第60輯、2011年3月、21-38頁、査読無し。

(2) Yoshihisa Yamamoto, “The Theory and Practice of Inculturation by Father Inoue Yoji: From Panentheism to *Namu Abba*,” in Kevin Doak ed., *Xavier's Legacies: Catholicism in Modern Japanese Culture*, University of British Columbia Press, 2011, pp.145-168、査読あり。

(3) 山本芳久「トマス『人格(ペルソナ)』論の挑戦 (書評特集『人格≪ペルソナ≫の哲学』を読む)」、『創文』No. 531(2010年6月)、創文社、10-13頁、査読無し。

(4) 山本芳久「西洋中世哲学の研究動向—多元化の現状と今後の課題—」、西洋中世学会編『西洋中世研究』第1号(2009年12月)、

156-169頁、査読あり。

(5) 山本芳久「盛期スコラ学における制度と学知：トマス『神学大全』の方法論としての「引用」と「区別」(シンポジウム制度と学知)」、中世哲学会編『中世思想研究』、51号(2009年9月)、142-155頁、査読あり。

(6) 山本芳久「アラビア語キリスト教の世界—イスラーム治下のキリスト教神学—」、『創文』No. 516(2009年1-2月)、創文社、55-58頁、査読無し。

(7) Yoshihisa Yamamoto, “Thomas Aquinas on the Ontology of *Amicitia: Unio and Communicatio*,” *Proceedings of the American Catholic Philosophical Association*, Vol.81, 2008, pp.251-262、査読あり。

[学会発表] (計9件)

(1) 山本芳久「アヴェロエス『決定的論考』における「啓示」と「理性」の調和」京大中世哲学研究会、2010年12月11日、京都大学吉田泉殿。

(2) 山本芳久「トマス・アクィナスとストア派倫理学」中世哲学会、2010年11月7日、東京大学本郷キャンパス。

(3) 山本芳久「神と哲学：トマス・アクィナスの創造論を手がかりに」哲学会、2010年10月30日、東京大学本郷キャンパス。

(4) Yoshihisa Yamamoto, “Yahya ibn Adi on Faith and Reason: A Structural Analysis of *The Reformation of Morals*,” IAS Second International Conference 2009 “New Horizons in Islamic Area Studies: Identities, Coexistence and Globalization,” December 12, 2009 Cairo.

(5) Yoshihisa Yamamoto, “Thomas Aquinas on the Ontology of *Amicitia*,” Workshop on Practical Philosophy in the Middle Ages (Organized by Tobias Hoffmann), September 21, 2009, Munich, Germany.

(6) 山本芳久「ヤフヤー・イブン・アディー『性格の陶冶』における倫理的生活の構造と射程」イスラーム地域研究早稲田拠点(WIAS)グループ1国内ワークショップ、2009年6月27日、早稲田大学。

(7) 山本芳久「盛期スコラ学における制度と学知：トマス『神学大全』の制度論的背景についての一考察（シンポジウム 制度と学知）」中世哲学会、2008年11月16日、明治学院大学横浜校舎。

(8) Yoshihisa Yamamoto, “Yahya ibn Adi on Faith and Reason: A Structural Analysis of *The Reformation of Morals*,” The VIIIth Conference on Christian Arab Studies, September 26, 2008, Diocesan Seminary of Granada, Granada, Spain.

(9) Yoshihisa Yamamoto, “Thomas Aquinas on the Ontology of Friendship: Selfness and Otherness,” The XXII World Congress of Philosophy, August 4, 2008, Seoul National University, Seoul, South Korea.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 芳久 (YAMAMOTO YOSHIHISA)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：50375599

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：